

1.1 ビバ、ボンタン！

年末に、鹿児島島の友人から「ボンタン」が届きました。下の写真



「ボンタン」、別名「ザボン」。世界最大の柑橘類です。

私が鹿児島勤務時代に教わったのは、17世紀末、中国の船が鹿児島島の阿久根に漂着した際、船の船長「謝文旦」が世話になったお礼にと苗木を贈ったというもので、その後、鹿児島では、その木に、船長の名前の下半分に当たる「文旦」という名を付けたのが由来というものでした。

ところが、その後にボンタンが伝わった長崎では、船長の名前の上半分に当たる「謝文」をとって「ザボン」と名付けたため、全く同じものが、鹿児島では「ボンタン」長崎では「ザボン」として定着したそうです。

新年早々、ウソっぼい？

でもね、中国では、ボンタンは「朱欒（しゅらん）」と呼ばれているそうですから、謝文旦説はそれなりに説得力があると思いませんか。

ただ、長崎には、ザボンは、ポルトガル語の **zamboa** からきているという有力な説もあるようですが、何でも外国語に語源を求めて説明しようとする傾向のある長崎のことですから、私は少し疑問に思いますねえ。 **zamboa** って、サイダーのことですからね。

そもそも、長崎に出島が作られ、オランダ・中国以外の国との関係が断たれたのが 1636年、1639年にはポルトガル船の来航すら禁止していた日本に、**zamboa** の名だけが伝わったというのはおかしいと思いませんか。ザボンが伝わる前の 17世紀半ばには、ポルトガルはアジアにおける制海権を完全に失っていたのですから。

ところで、江戸時代の初期から中期にかけて長く藩境を閉ざしていた鹿児島と違って、昔から交易を命としていた宣伝上手の長崎は、柑橘類最大の大きさを誇るザボンを、いかにも長崎の固有の特産物としてその宣伝に努めた結果、明治に入るまで、全国的にはザボンの名前の方が圧倒的に知名度が高かったのです。

戦後まもなく大変流行した歌に「長崎のザボン売り」という歌がありますが、この歌もザ

ボンの名を全国に知らしめたと言えます。ちなみに、この歌の歌詞は、

♪ 鐘が鳴る鳴る マリアの鐘が 坂の長崎 ザボン売り ♪

(中略)

♪ 黒い瞳に 夢みる笑顔 ゆれるランタン 灯影(ほかげ)に可愛い
可愛い娘 あゝ長崎のザボン売り ♪

という異国情緒溢れるものなのですが、これでは、ボンタンは手も足も出ないし、鹿児島
の示現流をもってしても太刀打ちできそうもありません。

このため、今でも、長崎のザボンと鹿児島のボンタンは、全く別のものと思っていられ
る方が非常に多いのです。

さて、文旦の白い花は、新緑がまぶしい5月の始めに咲き、11月から2月にかけて黄色い
美しい実がなります。彩りが少ない冬、大きな黄色い文旦の実は、大変目立ち、周りに小
さな光りが点っているように見えます。



庭隅に ゆふさり来れば 眼のごとく ボンタンの實 ほのか光れり (憲吉)

文旦は、香りが大変良く、部屋の中に1個置いておくだけで、その部屋は柑橘系のさわや
かな香りで一杯になります。

また、文旦の皮を少し切ってお風呂に浮かべると、浴室が南の国に早変わりします。

鹿児島県の阿久根では、12月に入ると、「あくねボンタンロードレース」というのがあっ
て、だれでも参加出来ます。参加賞は、大きな文旦1個。

優勝すると、文旦1年分。

ウソです。

私のうちで10個もらっただけで、始末するのに往生しましたから。

これでは、だれも一位になろうとする人がいなくなります。

これは余り知られていないのですが、日本固有の柑橘類とされている夏みかんや八朔に
は、文旦の血が流れています。

なんとあのグレープフルーツにも。

グレープ(葡萄)と言えば、ワインに詳しい方はご存じかと思いますが、フランスには、**ボンタン騎士団 (Commanderie du Bontemps)** というのがあって、ボルドーワインに貢献した方にはこの騎士団の騎士の称号が贈られます。

日本で文旦の普及に貢献した方にも、「薩摩藩藩士」の称号くらい考えたらどうですかね。うーん、だれも欲しがらないかなあ。

なお、蛇足ですが、ボンタンと発音するフランス語「**Bontemps**」は、**bon=良い temps=時** の意味を組み合わせたものです。

今年も沢山の「良い時」が皆さんにも訪れますように！
ビバ、ボンタン！！

1.4 鯨と鷗尾

今年は辰年ですから、龍にちなんだお話をと思ったのですが、新年早々おめでたいものといっても、滝登りに成功した鯉が龍になるなんて、いかにもウソっぽくて、なかなかこれはというものがないのですね。

仕方ないなあ、と思っていたら、ニュースで名古屋城の天守閣が大写りになって、金色のシャチホコのアップが目に入りました。

なんでも、今日は、シャチホコの日らしいのですね。



鯨銚の鯨って何となく龍にも似てるかな、これでもいいかと勝手に思っていたら、鯨の日というのは間違いで、正確には、「金の鯨の日」らしいのですね。

知ってました？ 知りませんよね。

名古屋の人には悪いけど。

でも鯨銚の話をする前に、このちょっと変な「金の鯨の日」を調べてみると、この記念日、やっぱり変な記念日なんですね。

ものの本によると、この日は、昭和 12 年、天守閣にあった金の鯨銚から金の鱗 58 枚が盗まれた日。

え、そんな日を記念日なんかにする？ 普通。

まあ、でも考えてみると、あの天守閣によじ登って、鯨銚から鱗を剥がしてくるなんて、なかなかすごいかも。 鳶職？ ビルの窓ガラスの拭き掃除屋さん？

それとも、大風に乗って...そんなわけないか。

気になってさらに調べてみると、さすがにそうではなかったみたい。

手元の資料によりますと、事实は、当時、天守閣には、実測図を作成するための足場が組まれており、正月の作業休止中に、泥棒さん、その足場を伝って天守に上り、鱗を剥いだようです。

この泥棒さん、今ならひょっと三億円事件を凌ぐマスコミの英雄になってたかとも思わないでもないけれど、愚かにも、これを溶かして売ったものだから、敢えなく御用になって、懲役 10 年の実刑。

私なら、窃盗の罪の時効を待って、溶かさずに、名古屋城の鱗一枚 100 万円で、ネット販売考えるけど。

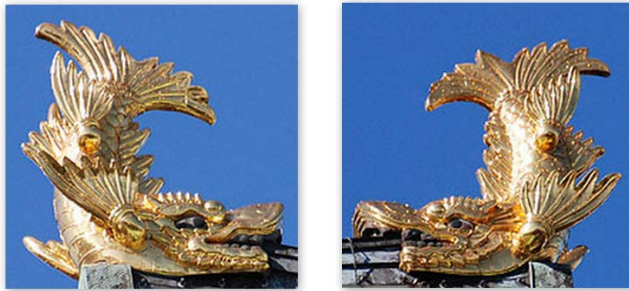
ところで、盗られたのは雄の鯨の鱗。

え、鯨鉾にも雄と雌があるのかって？

あるんですよ。

名古屋では知っておられる方が多いと思いますが、雄の方が少しだけ大きくて重く、形も少し違うのだそうです。

写真をよく見ると、口が大きく開いていて、尾ひれが真っすぐ上を向いているのが雄。天守の上に鎮座していると全く区別はつきませんね。写真左が雌、右が雄。



ところで、鯨は、頭が「虎」で、身体が「魚」の形をした想像上の生き物ですね。

鯨の漢字は、難しそうだけれど、この二つをくっつけただけなんです。

この鯨、天守が火事になると、口から水を吐き出して火を消すという伝説があって、大切な天守が火事になったときに備えて天守のてっぺんに置かれているみたいです。

はじめて鯨鉾を城の天守の守り神として設置したのは織田信長くん、もちろん、安土城の天守です。

あ、残念ながら、安土城も、空襲で燃えた名古屋城の場合も、水を吐き出さなかったようですね。もっとも、名古屋城の場合、被災する直前に、疎開のために雌が先に地上に降ろされていたため、雄だけではどうしようもなかったという話もありますけどね。

思うに、私が、なんとなく鯨鉾の鯨と龍が似ていると思ったのは、この水を吐くということだったのですね。

龍は、水神。

神社の手水舎でも、水を吐いている吐水龍をよく見ますよね。ついでに昔の消防ポンプは「龍吐水」。

ところで、鯨鉾の元祖は、「鷗尾(しび)」。

東大寺の大仏殿や唐招提寺の金堂の屋根にいますので、御覧になった方も多いと思います。

鷗尾は、中国の伝説の魚で、雨を降らす力を持っているとされ、鯨と同じ様に、火除けの守り神として設置されたようです。



屋根の上に置かれている鴟尾は、海面から飛び上がって、尾と胴体を空中に出した姿を表したもので、どうして火除けの守り神かというと、尾と胴体の下は海。つまり、鴟尾の下にある建物本体は水中にあるので燃えないとされたようなんですね。

この鴟尾ですが、その元になっているのは、インドの魔羯魚（マカラ）。これ、実はガンジス川にいるワニのことなんですね。

マカラは、サンスクリット語でクンピーラというのですが、これ、日本では、金毘羅さんなんですね。

龍と鯢と鴟尾と鰐、これ、みんな親戚？
そういえば、なんとなく顔が似てるような気がしてきたなあ。

1.6 塩昆布と鰯

去年の年末に、ある方から「塩昆布」をいただきました。

ところが、いつまで経っても、これが出てこないんですね。

お正月に、お餅で胸焼けしたもんだから、お茶漬けにしようと思って「あの頂いた塩昆布、どうした？」と聞いたら、「あ、あれは高いから、またいつか、お客様が来たときに。」えーっ。

そんなあ、幾ら高いからたって、昆布でしょ。

どこの？

大阪の神宗

神宗？

昔の中国の皇帝の名前みたい。だから高いのかな？

そういえば、昆布といえば、富山も有名ですよ。

これ、江戸期に「北前船」で北海道から運ばれた名残りですよ。

そうそう、司馬リョータローくんの「菜の花の沖」だっけ、あのなかで出てくる 1000 石積みの「弁才船」、逆風の中でも帆走できたんだよね。

昔々読んだ本に、大阪が天下の台所の地位を不動にしたのは、弁才船の西回り廻船ができたからって書いてありましたね。

大阪のあきんどさん達、だから航海の安全を守る神様を大事にしたのですね。

その大阪の豪商たちが信仰したのは、「金毘羅さん」。

金毘羅さん、その頃、航海安全の神様とされていましたから。

その後、航海の安全の神様は、いつの間にか、富をもたらす神様になり、多くの庶民の金比羅参りを生み出したのですね。

関西では、金毘羅さんは、ご利益絶大。

♪ 金毘羅 ふねふね 追い手に帆かけて しゅらしゅしゅしゅ

この歌、大阪から室津、牛窓、丸亀と三日かけて、金毘羅参りに行くときに、参詣者が乗る船のことを歌ったものですね。

ところで、金毘羅さんに祀られている神様は、実は、出自がインドの神様。

えーっ、と驚かないでくださいね。

日本には、もともとインドから来られた神様が結構おられるんですよ。

例えば、私たちが一番身近に感じている七福神さんも、そのうち 3 人(神?)は、インド出身。

誰かって？

えーと、
大黒さん（大国様ではありません！）と
弁天さんと
毘沙門さんですね。

あと三人は、中国出身。
日本人は、恵比寿さんだけなんですねえ。

あ、横道に逸れたけれど、
金毘羅さん（宮毘羅大将）は、仏さま達を守る十二神将のお一人。
「クンピーラ」さんです。



お仲間には、「男はつらいよ」の寅さんで有名な「帝釈天さん（インドラ大将）」なんかがおられますし、神社の門のところでタマに見かける「金剛さん（バサラ大将）」もそうですね。

クンピーラさんを「金毘羅さん」にするなんて、日本人もなかなかやりますねえ。

ところで、このクンピーラさん、元はガンジス川に住んでいた「ワニ」さん。

ワニって、日本にはいなかったのに、なぜか古い昔から「わに」という言葉は伝えられていたのですね。大陸から渡来した人たちが持ち込んだのですね。日本では「和邇」。

あ、そうそう、半月ほど前に、横浜の野毛で、ワニの唐揚げを食べました。

これは、本物の鰐。

一つ 300 円でした。

なんというか、鶏肉とあまり変わらぬ味でしたがね。

今から思うと、ちょっとまずかったかな。

今年は、金毘羅さんのご利益は、受けられそうもないなあ。

1.8 百人一首の親子関係

お正月にする百人一首は、小倉百人一首と呼ばれているものが普通ですが、これ、藤原定家さんが、古今の勅撰和歌集から独断と偏見で選んだ私撰和歌集なんですね。

飛鳥時代から鎌倉時代初期まで並んでいる 100 首を眺めると、各時代を反映したものが多い気がしますが、中にはすごくヘターなものもあって、定家さん、どういう基準で選んだのかな？ と思うことがあります。

その中で、私が気になるのが、100 人の詠み人の人間関係。
例えば、100 人の中には、親子の関係にある者が結構いるのですね。

どのくらいだと思います。

10 首 10 人くらい？

20 首 20 人くらい？

いえいえ、なんと 33 首。

三代続けて、つまり、祖父、父、子の詠んだ歌が採用されているのもあって、これを入れると、36 首。

さらに、親子ではないけれど、祖父母と孫という関係にあるものが 12 首もあるのです。これまで入れると、なんと、100 首のうち、48 首（一人重複）。半分近くを占めているのですね。

これ、どういうことなんでしょうかね。

ひょっとすると、歌を詠む才能は遺伝する？

そうとしか思えませんよね。

どおりで、私がいくら頑張っても、うまくないわけだ。

例えば、百人一首の 1 番と 2 番は、御存じ、天智天皇と持統天皇が詠んだものですが、この二人は父と娘の関係ですね。

秋の田の かりほの庵の 苔をあらみ 我が衣手は 露にぬれつつ 天智天皇

春すぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天のかぐ山 持統天皇

この両人、政治の世界では、権謀術策の権化のようなワルで、敵をバツバツと倒し続けた冷酷無比の人間としか思えないんだけど、歌の世界では、それ、誰のことっていうような歌詠んでますねえ。

ついでに、最後の 99 番と 100 番は、後鳥羽院と順徳院。これも親子天皇ですね。

人を惜し 人も恨めし 味気なく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は 後鳥羽院

百敷や ふるき軒端の 忍ふにも なを餘りある むかし成けり 順徳院

兩人ともに流刑（隠岐と佐渡）されているところからおわかりのように、政治の場で失敗するような頭でっかちの人間がいかにも詠みそうな歌ですよ。

とてもカワイソーだから、定家クンがお義理で入れといたと感ずるのは、私だけ？

紫式部さんと大式三位さんも、母子の関係。

和泉式部さんと小式部内侍さんも、母子の関係。

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 今ひとたびの 逢ふこともがな 和泉式部

大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立 小式部内侍



ところで、小式部内侍さんの詠んだこの歌ですが、これ、権中納言藤原定頼クンから「今度の歌会に詠む歌はお母さんから届きました？」とからかわれた小式部内侍さんが頭にきて、言い返した歌なんですね。

このとき、小式部内侍さんのお母さん、和泉式部さんは、夫について丹後の国に行っていたのです。

[拙訳]

（私の母は、いま天の橋立のある丹後の国にいますけど、彼の地は大江山を越えてはるばる生野の道を辿らなければならないほど遠いのです。私自身は、残念なことにまだ天下の名勝と言われる天の橋立に行くことができないでいますが、遙か天の橋立にいる母からは私などに便りなどありません。私と母（の力量）は、それほど離れているのですよ。それほど格差のある母の歌と私の歌との区別がつかないなんて、あなたの歌を観る力はたいしたことがないんですね。）

これ、失礼な定頼クンに対する強烈なしっぺ返しの歌なんですね。

なお、この軽率で口が軽いチャラオの藤原定頼クンも、歌だけはまあマシで、その父、四条大納言藤原公任クンとともに、百人一首に登場しているのです。

朝ぼらけ 宇治の川霧 絶え絶えに あらはれわたる 瀬々の網代木 藤原定頼

チャラオくん、霧を通して網代木を見ることはできても、女性の心は見るができなかったようですねえ。

7.19 世界文化？遺産

富士山が世界遺産に登録されたということで、最近、旅番組ばかりでなく、いろんなテレビ番組で、富士山の特集をしているみたいですね。寄ってたかって、今年は知られざる富士山のマル秘スポットに行こう！みたいな感じ。

こんな様子だと、仮に青木ヶ原樹海で首を括ろうと思っても、若い女の子が見物に寄ってきて「きゃあ、スゴイ、早くやってえ」なんて言われちゃうかも。

このお山、冬になって空気が澄んでくると、私の住んでいる横浜からもよく見えるのですね。仙台を往復していても、新幹線が埼玉県に入ると、よく目に飛び込んできます。ですから、個人的には、わざわざ見に行こうなんて思ったこともないのですが、それでも、東海道新幹線に乗って富士川を渡るときなど、見えていないとなんだか損をした気分になるから不思議です。

私の家内は、静岡県旧清水市生まれなので、これまたなんの関心もなく、世界遺産の選定の際、三保の松原が併せて指定されたときも、「昔ならともかく、今の三保の松原じゃあ、どうかねえ。天女も降りてこないわよ」なんておっしゃる。う～ん。



ところで、私の年齢だと、富士山と言えば、「お座敷小唄」か「ふじのやま」

♪ 富士の高嶺に 降る雪も / 京都先斗町に 降る雪も
雪に変わりは ないじゃなし / とけて流れりゃ 皆同じ

この唄、明らかに歌詞がおかしくて、「雪に変わりは ないじゃなし」だと、雪に変わりがあるということになって、とけて流れりゃ皆同じとはならないんですね。

これは、和田ヒロシとマヒナスターズが間違えたせい。

でも、結果としては、富士の高嶺に降る雪は、麓に豊かで大量の湧水をもたらすのに対して、先斗町に降った雪は、溶けても鴨川に流れ込んで、大阪湾に注ぐだけで、大変な違いがあるから、怪我の功名か？

一方、「ふじのやま」の方は、

♪ あたまを雲の上に出し、/ 四方の山を見おろして、
かみなりさまを下に聞く、/ 富士は日本一の山。

この歌も変なところがあって、頭が雲の上にあるのに、どうして四方の山を見下ろせるんだという昔からのイチャモン付きの歌。

この歌、あの桃太郎や一寸法師の歌を作った文部省御用達の巖谷小波が明治の終わりに作詞したもの。当時、日本は既に台湾を領土としていて、台湾には、「ニイタカヤマノボレ」で有名な新高山 3952 ㍎があったのだけれど、これはあっさり無視。

まあ、彼が作った桃太郎なんかの歌をみても、この人ならこれくらいお茶の子。

まあ、歌詞がどうであれ、富士山は、誰が見ても美しいから、ちょっとくらい変でもみんな許されちゃう。

そういえば、昔々、ミスなんとか日本一の女優さんに山本富士子さんって方いましたよね。子供心にも演技下手クソと思ったけれど、峰不二子クンと同じで、スタイルがよければ、ヒドイことしても許されちゃうみたい。

富士山の神さまは、元々「浅間（せんげん）」さんという女の神さま。

大変、短期で怒りっぽい神さまで、いつも頭から湯気を立てていた。

昔噺だけれど、自分が日本で一番と思っていた「せんげんさん」、八ヶ岳の「ごんげんさん」と高さをめぐってケンカして、仲裁に入った如来さまが両方の山に樋をかけ、水を流したところ、富士山の方に流れて二番目ということになっちゃった。

これがどうしても気に入らない「せんげんさん」、ある夜、棒で八ヶ岳の頭をぶん殴ったら、爆発して頭が吹っ飛んで、一番を取り戻したというくらいの暴力ババア神なんですね。

神さまなのに、これではマズイと思ったのか、後世の権力者達、神さまを「木花開耶姫(この花咲くや姫)」にチェンジしちゃったんですね。

今は、噴火を押さえ、なだめ役の神さまが、富士山の神さま。なんか釈然としませんね、そう思いませんか。

富士山が頭に来て大爆発した歴史で、史書に残っている最も古いのが 864 年の「貞観の大噴火」（日本三代実録）。

貞観？ 聞いたことあるような。

そう、1000 年に 1 回の大地震と言われる東日本大震災と同じ位の規模で、遠い昔に東北を襲った「貞観大地震」、アレですよ。

「青木ヶ原樹海」は、このときの溶岩流の上に来たものです。

貞観の次の富士山の大噴火は、1707 年の宝永地震(M8.6)の 49 日後に起こっていますが、こちらは、記録が沢山残っていて、新井白石の『折たく柴の記』が有名です。噴火は 16 日続いて、周りの集落は殆ど灰の下に埋もれてしまい、その後に起こった洪水と土石流で、死亡者数知れずと書かれています。

火山学には全く知見がない私ですが、世界遺産も嬉しいには違いないとして、つい 300 年

ほど前に大噴火して沢山の方が死んでるけど、そっちの方の対策は大丈夫なのかなあ、と
なんとなく不安です。

なんといっても、1200年前の貞観地震の再来を経験したばかりですからねえ。

とにかく余り文句を言わないようにするから、木花開耶姫さん、お願いしますよね。